学図 小国209

教育學部資料室

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449667

文部省検定済教科書

財団法人 学校図書研究会編修

こくごニ年生 上

小KC
G16
k

学校図書株式会社発行

60382
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449667

寄贈

こくご二年生 上

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449667

広島大学図書
0130449667

学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449667

もくろく

(一) はるが きた

一 はるの うた……4
二 二年生に なって……8
三 おつかい……14
四 えんそく……20
五 めだかすくい……26
六 ささぶね……30

(二) おじさんの うち

一 きしゃ……34
二 いなか……40
三 うし……44
四 ほたる……46
五 おじさんの はなし……49

(三) うれしい なつ

一 えにっき……58
二 みんなの はなし……64
三 赤い かき……98
四 てっぽうの 音……102
五 きんちゃんが いない……104
六 ながい はしご……107

(四) お月み

一 すすきとり……74
二 夕やけ……78
三 お月み……82
四 虫の 声……86

(五) おさるの はしご

一 からすの おばさん……92
二 みみちゃんといっしょに……95
おしごとの 手びき……112
あたらしく でた ことば……121
かんじ……127

(一) はるが きた

一 はるの うた

（一）

むこうの お山に はるが きた。
かぜに のって、
くもに のって、
とんから、とんから、
はるが きた。

こっちの お山に はるが きた。
かぜに のって、
くもに のって、
とんから、とんから、
はるが きた。

いなかに まちに はるが きた。
かぜに のって、
くもに のって、
とんから、とんから、
はるが きた。

（二）

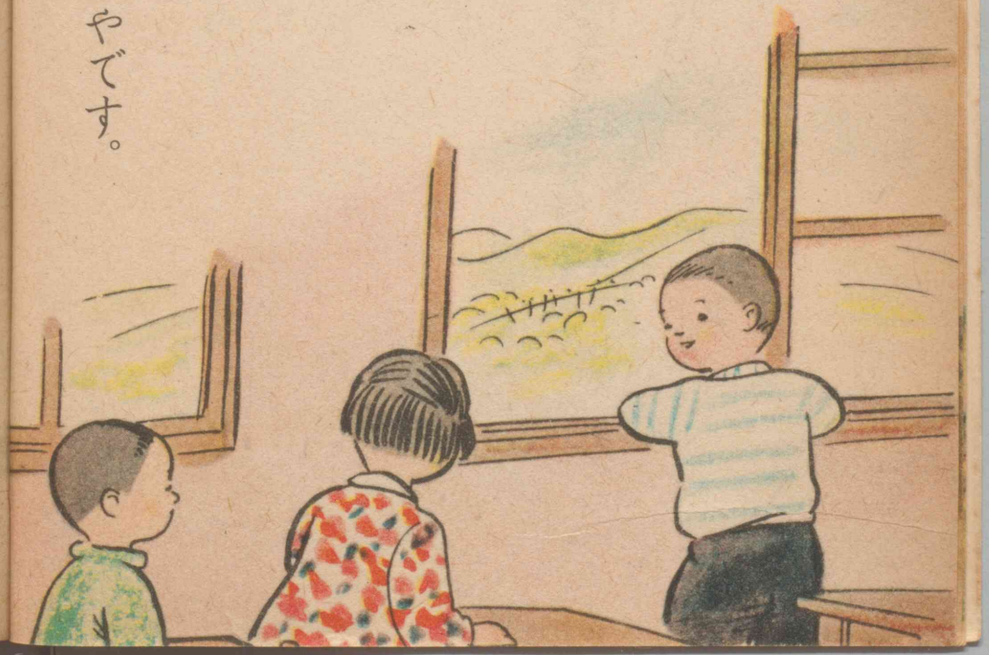
たんぽぽの　はな、
ふわり　ふわり。
一本めの　はなは、
ひがさを　さした。
ひがさを　さして、
かぜの　中　とんだ。

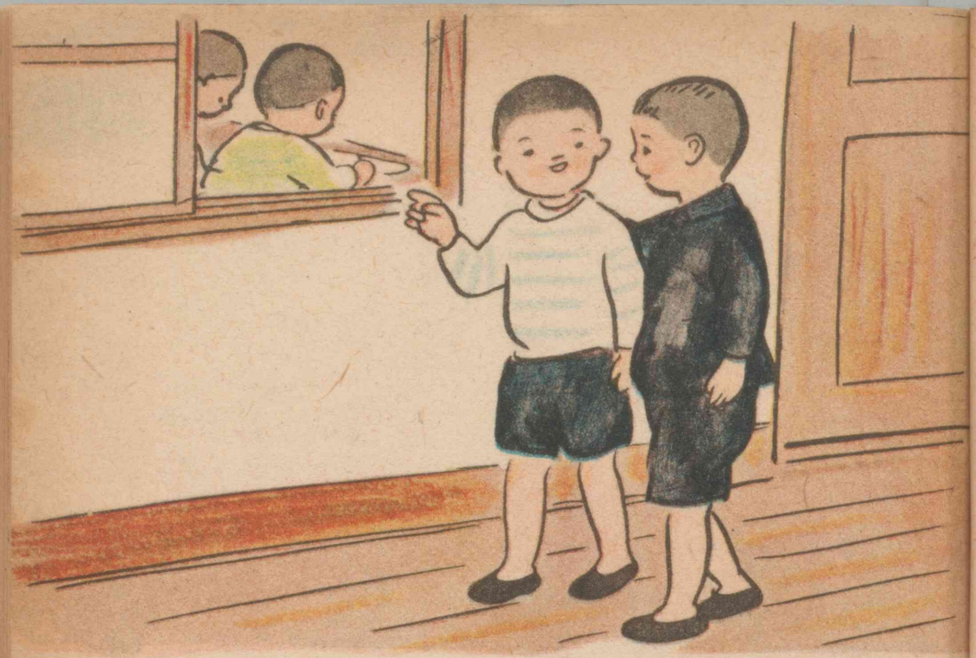
二本めの　はなも、
ふわり　ふわり。
かぜの　中　とぶのに、
ひがさを　さした。
ひがさを　さして、
かぜの　中　とんだ。

二　二年生に　なって

（一）

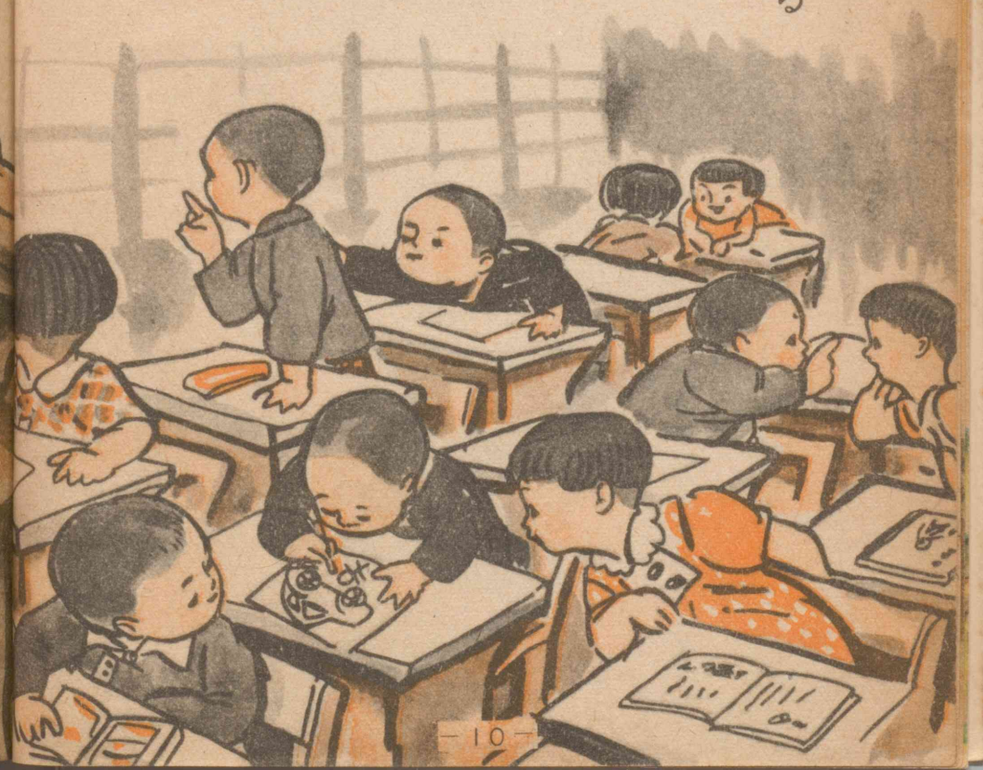
まさおさんは　二年生に
なりました。
すみこさんも　みちおさんも
二年生に　なりました。
二年生に　なって　おへやが
かわりました。
むこうの　お山の　みえる　へやです。





つくえも　かわりました。
先生も　かわりました。
かわいい　一年生が　はいって
きました。
まさおさんは、一年生の　おへ"
やの　まえを　とおりました。
一年生の　おへやには、えを
かいて　いる　子どもが　います。
おはなしを　して　いる　子ど"
もも　います。

大ごえで　うたって　いる
子どもも　います。
たいへん　にぎやかな
おへやです。
まさおさんは、
「一年生だね。」
と、いいました。
みちおさんは　にっこり
わらいました。



（二）

先生が　おへやに
いらっしゃいました。
みんなで　あいさつを　しました。
二年生に　なった　おはなしを、
する　ことに　なりました。
みちおさんが　たちました。
「先生、ぼくは　おにわの　そうじが　で
きます。」と、いいました。

こんどは、まさおさんが　たちました。

「ぼくは、おかあさんの　おつかいを　します。」

と、いいました。

「わたくしは　ひとりで　おきるのよ。」

と、ゆきこさんが　いいました。

すみこさんは、

「がっこうに　くる　とき、一年生の　ちえこさんを　つれて　くるのよ。」

と、いいました。

先生が、

「みんな　いい子だね。」

と、おほめに　なりました。

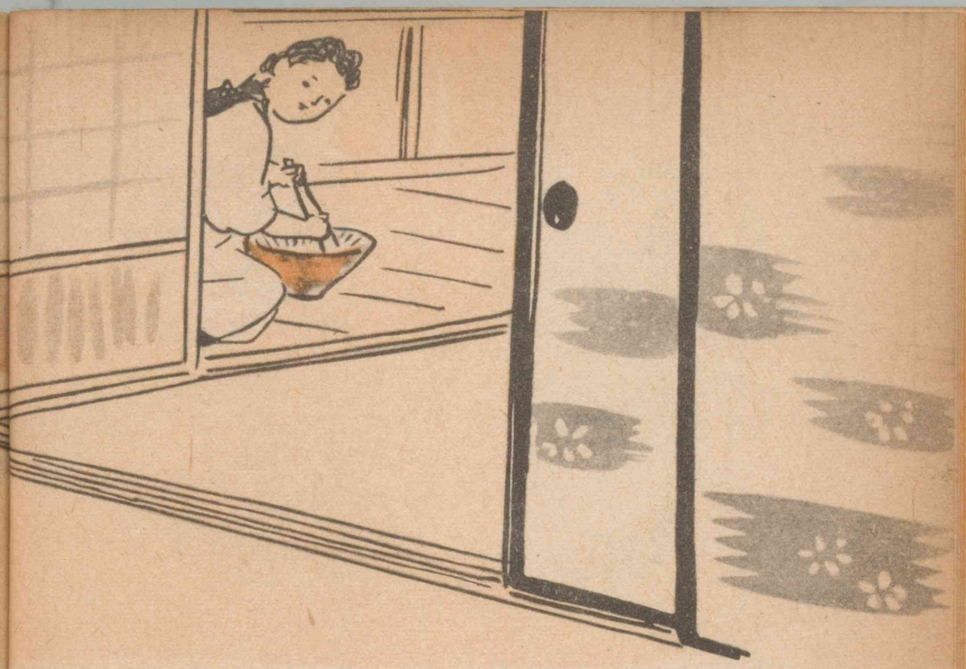
すると、だれかが、

「二年生だもの。」

と、いいました。

「二年生だもの。」

まさおさんは、小さな　こえで　いって　みました。



三　おつかい

まさおさんは、おはなしの本を　よんで　いました。

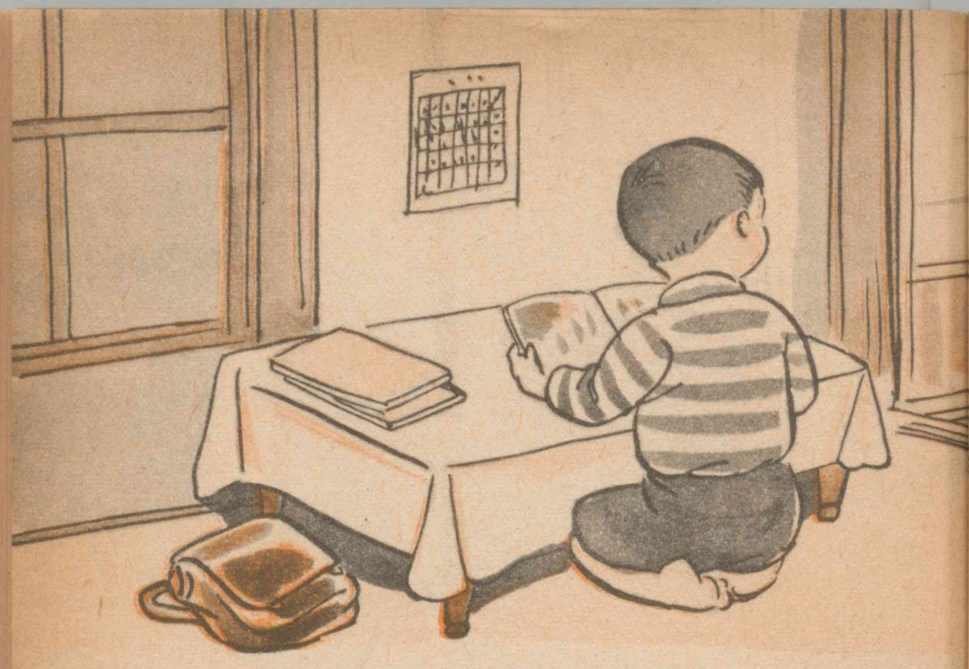
すると、おかあさんが、

「まさおさん、まさおさん。」

と、およびに　なりました。

まさおさんは、

「はあい。」と、大きな　こえで　へんじを　しました。



おかあさんは、

「えんそくの　おべんとうを　つくりますから、おつかいに　いって　ください。」

と、おっしゃいました。

まさおさんは、かみを　もって　きました。

それに、

かまぼこ　二本。

たまご　みっつ。

にんじん　五本。
こぶまき　むっつ。
と、かきました。
まさおさんは、それを　もって
おつかいに　いきました。
よしこさんも、ついて　いきま
した。
むこうから　すみこさんが　きました。
すみこさんも　おかあさんの　おつかいだそうです。
おみせに　いきました。

おみせには、おきゃくさんが　たくさん　います。
たまごを　かう　人が　あります。
にんじんを　かう　人が　あります。
おみせの　おじさんは、
「はい、ありがとう。」
「はい、ありがとう。」
と、いそがしそうです。
まさおさんは、
「おじさん　こんにちは。」
と、いいました。

「やあ、いらっしゃい。なにを
あげましょうか。」
と、おじさんが おっしゃいま
した。
まさおさんは、
「これだけ ください。」
と いって、かみを だしました。
「はい、はい、わかりました。」
おじさんは かみを 見ながら、ひとつ ひとつ だし
て くださいました。

「みんなで、二百七十えんです。これに かい
て おきますからね。」
と いって、その かみを ください ました。
まさおさんたちは いそいで
かえりました。
「おつかい ありがとう。これで
えんそくの おべんとうが
できますよ。」
と、おかあさんは にこにこ
しながら おっしゃいました。

四　えんそく

きょうは　まさおさんたちの
えんそくです。
まさおさんは　あさ　はやく
おきました。
おかあさんは、もう、
おべんとうを　つくって
いらっしゃいます。
まさおさんは　うれしくて

たまりません。
みちおさんが　よびに
きました。
いっしょに　うちを　でました。
がっこうに　つくと、もう、
みんなが　きて　いました。
まもなく、先生が
いらっしゃいました。
みんなは　先生の　ところに
はしって　いきました。

「さあ、いきましょう。
手を つないで がっこう"
を でました。
「はるの うた」を、うたい"
ながら あるきました。
いなかみちに でました。
「やあ、きれいだな。」
みちおさんが いいました。
たんぼには、なの はなが
たくさん さいて います。

ちょうちょうが ひらひら とんで います。
はしの ところで やすみました。
そのとき、だれかが、
「おべんとうを たべても いいの。」
と、いいました。
みんな わらいました。
すこし やすんで、
また、あるきました。
「さあ、ついたよ。」
と、先生が おっしゃいました。

ここは　すいげんちです。
すいげんちには、水が　たくさん　あって、おいけのよ
うでした。
まわりには、きれいな　はなが　さいて　いました。
みんな、先生の　まわりに　あつまりました。
先生は　すいげんちの　はなしを、して　くださいました。ゆきこさんが、
「こんな　お水を　のむの。」と、いいました。先生は、この　水が　きれいに　なる　はなしを、して　くださいました。

おはなしが　すんで、山の　上に　あがりました。
みんなで　おべんとうを　たべました。
すみこさんたちは、おはなを　つんで
あそびました。
まさおさんは、はしの　ところで
見た、めだかの　はなしを　しました。
こんどの　やすみに、
みちおさんと　めだかすくいに
いく　ことに　しました。

五　めだかすくい

まさおさんは、みちおさんと
めだかすくいに　いきました。
ふたりは　あみを　もって
いきました。
えんそくの　とき　とおった、
はしの　ところに　きました。
川には、めだかが　たくさん
およいで　います。

「あ、大きいのが　いるよ。」
と、みちおさんが　うれしそうに　いいました。
めだかは、すこし　いっては　とまります。
ふたりは、おとの　しないように　ちかよりました。
まさおさんは、あみを　水の　中に　いれて、さっと
あげました。
すると、めだかは　すうっと
にげて　しまいました。
こんどは　みちおさんが
しました。

みちおさんは、めだかが　とまらないかと　おもって、
じっと　見て　いました。
めだかは　どうしても　とまりません。
すうっ　すうっと、のぼって　いきます。
みちおさんは　おもいきって、さっと　すくいました。

足が　すべりました。
「あっ。」と　いって、
川に　おちて　しまいました。
みちおさんは、ふくが

ぬれて　しまいました。そこへ　ゆきこさんが　きました。
「みちおさん、どうしたの。」と　いって、ゆきこさんは
おどろいたような　かおを　して　います。
「川に　おちたんだよ。」と、みちおさんが　いいました。
ゆきこさんは　はしって
いって、かわりの　ふくを
もって　きて　くれました。
三人は、むぎばたけを
とおって　かえりました。

六　ささぶね

まさおさんたちは、小川の　きしで　ささぶねを　つくりました。

すみこさんが、

「こんな　かわいらしいのが　できましたよ。」

と、いいました。

見ると、小さな　ささぶねを　じょうずに　つくって　いました。

「ぼくは　大きいのを　つくるよ。」

と、たかしさんが　いいました。

みんなの　ささぶねが　できました。

はじめに、まさおさんが　ながしました。

ささぶねは、たんぽぽの　はなを　のせて、すうっと　ながれて　いきます。

こんどは、みんなで　いっしょに

ながしました。

きれいな　水の　上を、大きな　ささぶね　小さな　ささぶねが、すべるように　ながれて　いきます。

すこし　かぜが　ふいて　きました。

すると、ささぶねは　はしりだしました。

たかしさんが、

「ささぶねと　かけっこを　しよう。」

と、いいました。

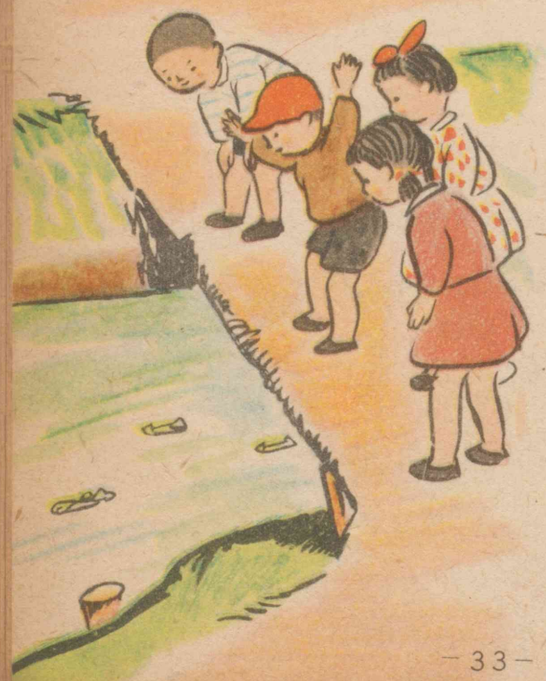
みんなは　ささぶねを　おいぬいて、はしの　上に　きました。

ささぶねは　だんだん　ちかよって　きます。

はしの　下に　はいったかと　おもうと、すぐ　でました。

どんどん　ながれて　いきます。

ささぶねは、これから　どこへ　いくのでしょう。



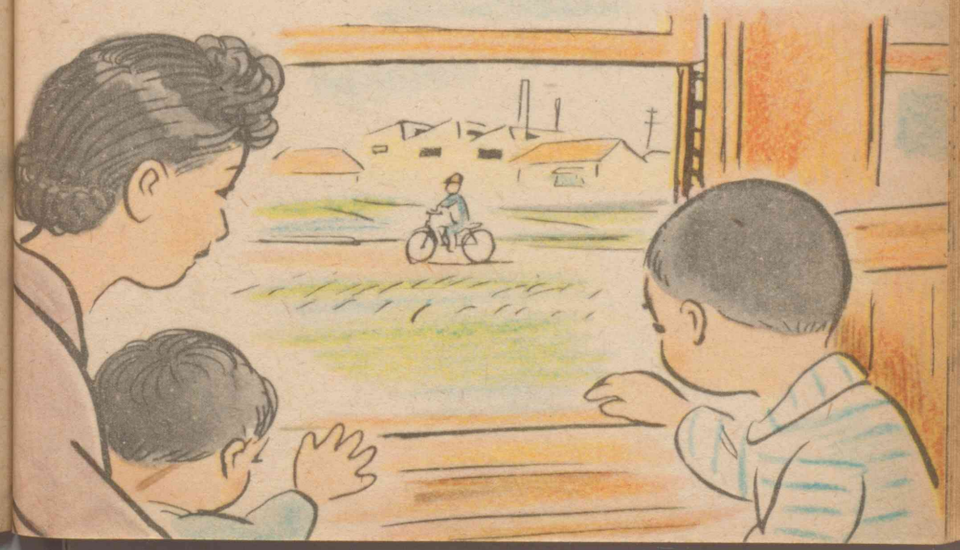
（二）おじさんの　うち

一　きしゃ

まさおさんたちは　えきに
つきました。
えきには　人が　たくさん
いました。
みんなは　きれいに　ならんで、
きっぷを　きって　もらいました。

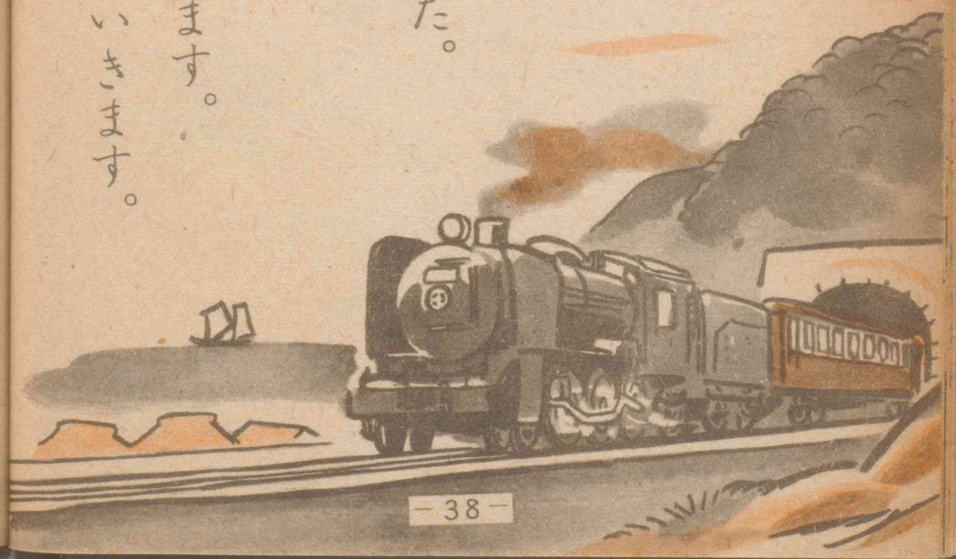
「パッチン、パッチン。」
きもちの　いい　音が　します。
まもなく、きしゃが　大きな
音を　たてて、はいって　きま
した。
「ピイーッ。」と、きてきが　な
って、きしゃは　うごきだしま
した。
「シュッ、シュッ、ポッポ。シュッ、シュッ、ポッポ。」
と、だんだん　はやく　なって　いきます。

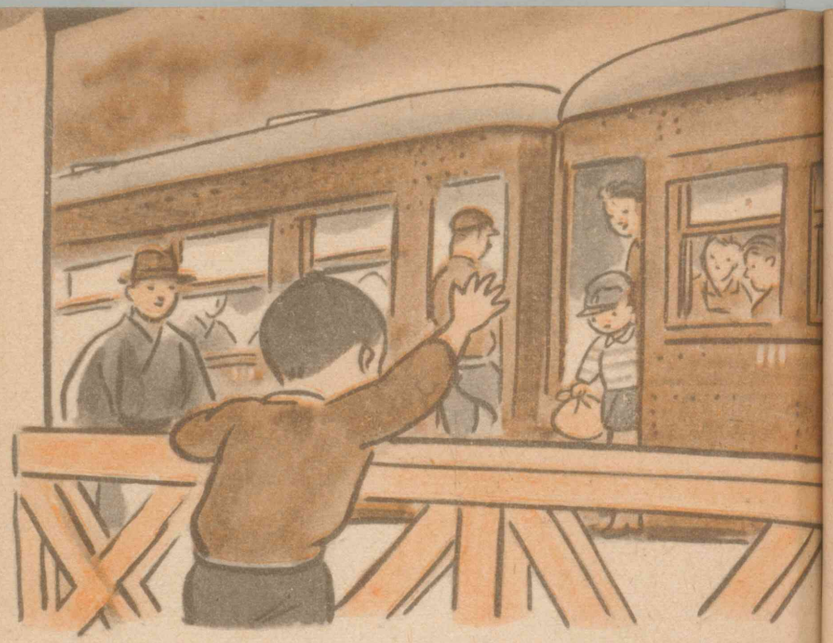
まちを　とおりぬけました。
いえも　たんぼも、あとへ
あとへと　とんで　いきます。
じてんしゃに　のった　人を、
あっと　いう　まに　おいぬき
ました。
ふたつめの　えきを　でました。
きしゃは　山みちを　とおり
ます。
「ポッポ　ポッポ。」



と、のぼって　い
きます。
まもなく、
「ゴーッ。」
と　いう　音を
たてて、トンネル
に　はいりました。
まどの　ガラス
が　白く　なりま
した。

さっと　あかるく
なりました。
「おかあさん、うみですよ。」
と、まさおさんが　いいました。
「きれいな　うみね。」
と、おかあさんが　おっしゃいました。
あおい　あおい　うみです。
ひろい　ひろい　うみです。
むこうの　ほうに　ふねが　見えます。
きしゃは　どんどん　はしって　いきます。





「こんどの　えきで　おりますよ。みんな　よういを　しましょう。」
と、おかあさんが　おっしゃいました。
きしゃは　よっつめの　えきに　つきました。
「まさおさん。」
という、こえが　します。
でぐちで、一ろうさんが　手を　あげて　います。

二　いなか

みんな　いっしょに
いなかみちを　あるきました。
ひろい　たんぼの　中に、
白い　みちが　つづいて
います。
まさおさんは、一ろうさん
と　手を　つないで　あるき
ました。

あちらでも　こちらでも、
むぎかりを　して　います。
子どもも　いっしょに、むぎ
かりを　して　います。
大きな　うしが、いったり
きたり　して　いる　たんぼ
も　見えます。
いなかの　人は、いそがし
そうです。
はしの　上に　きました。

川には　きれいな　水が、
あふれて　います。
白い　ぼうしを　かぶった
子どもが、川ぎしを　はしり
まわって　います。
手には　大きな　あみを
もって　います。
「あれは、ふなを　とって
いるのだよ。」
と、一ろうさんが　いいました。

みんなは、おじさんの　うち
ちに　つきました。
わらやねの　大きな　いえ
です。
いえの　まわりの　かきの
木が、あおあおと　して　い
ます。
「こ、こ、こ、こ。」
と　なきながら、にわとりが
はしって　いきました。

三　うし

まさおさんは、うしを　見に　いきました。
おやうしが　じっと　たって　います。
目を　小さく　して、口を　うごかして　います。
よしこさんが、
「おじさん、こうしは。」
と、ききました。
「よく　見て　ごらん。」
「いた、いた。」

こうしは　おやうしの
ちちを、おいしそうに
のんで　います。
足が　しっかり　しないので、
しょう。おやうしが　うごくと、
ころげそうに　なります。
おじさんが、
「どん、どん、どん。」と、かいばおけを　たたきました。
こうしは　きょとんと　して、こちらを　見ました。

四　ほたる

夕はんの　あとで　おばさんが、
「この　へんは　ほたるが　おおいのですよ。
みんなで　見に　いきましょう。」
と、おっしゃいました。
まさおさんたちは　うれしくて　たまりません。
すぐ　よういを　して
うちを　でました。
「ほう、ほう、ほたる　こい。」

あちら　こちらで、ほたるを
よぶ　こえが　します。
「はしの　上が　いいよ。」
と、一ろうさんが　いいました。
みんなは、はしの　ところへ
かけて　いきました。
すうっ、すうっと、ほたるが、
みんなの　まえを　とんで　いき
ました。
「あら、あんなに　ひかって。」

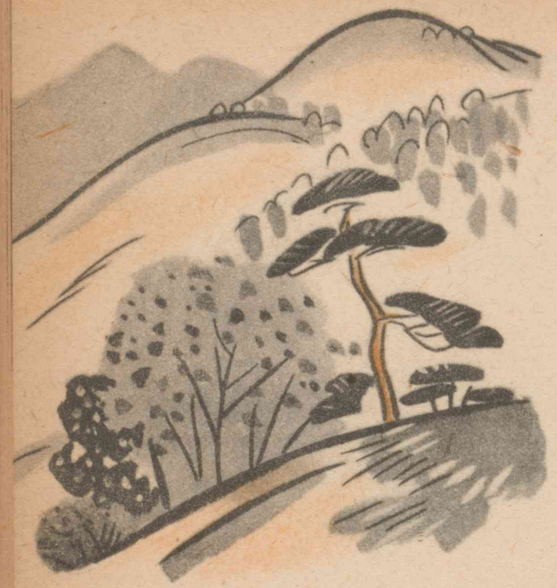
そう　いった　とき、よしこ〃さんの　むねに　ほたるが　と〃まりました。

ぴかっと　ひかって、また、ひかりが　よわく　なります。

「わたしを、おかあさんだと　おもったのかも　しれないわ。」

と、よしこさんが　いいました。

五　おじさんの　はなし



山の　中は　あつい　日が　つづきます。

山の　どうぶつたちは、「すずしい　ところは　ないかな〃あ。」と、みんな　いい　ところ〃を　さがして　いました。

りすも　いい　ところを　見〃つけようと、山の　中を　ある〃いて　いました。

「やあ、ここは　いいぞ。」

りすは　よろこんで
たちどまりました。
そこは、山の　中でも
一ばん　たかい　ところです。
目の　まえには、ひくい　山が
見えます。
その　むこうに、まちも　見えます。
すずしい　かぜが　ふいて　きて、あつさを　わすれて
しまうようです。
「ここは　きもちが　いいぞ。」

りすは　よろこんで　しまいました。
ごはんを　あつめて　きたり、ねる　ところを　つくったり　して、なつを　おくる　よういを　しました。
そこへ　さるが　きました。さるは、
「だれだ。そこに　いるのは。そこは　ぼくが　まえから　いた　ところだ。」
と、いいました。
りすは、おどろいて　にげて　いきました。

「やあ、ここは いい ところだ。それに ごはんも あるし、ねる ところまで つくって ある。」と いって、さるは いい きもちで、ねて しまいました。

すこし してからです。

「だれだ。」と いう、こえが きこえます。

さるは 目を あけて みました。

そこには、きつねが 立って いました。

さるは きつねを 見ると、おどろいて にげだしました。

「は、は、は、は。にげた、にげた。」

「やあ、ここは いい ところだ。ここに いる ことに しよう。」

と いって、きつねは 中へ はいって いきました。

くまが きました。

「だれだ、ぼくの いた ところを とって しまったのは。」と、大きな 声で いいました。

きつねは いそいで にげて いきました。

「やっぱり　ぼくは　つよいんだな。」
と、くまは　うれしそうに　いいました。
くまは　そこで、なつを　おくる　ことに　しました。
それから、なん日か　してからの　ことです。
くまは　きょうも、まちの　ほうを　見て　いました。
すると、きゅうに　くろい　くもが　でて　きました。
くまは　にげようと
しました。
そのとき、大かぜが
さっと　ふいて　きま

した。
くまは　かぜに
ふきとばされて、ころがりながら
おちて　いきました。
やっと　とまりました。
そこは、きつねの　おうちの　まえでした。
「ああ、たすかった、たすかった。」
と、よろこんで　いると、きつねが　でて　きました。
そこへ、さると　りすが　きました。
「くまさん、どう　したの。」

と、きつねが　ききました。

くまは、その　わけを　はなして、

「きつねさん。すずしい　ところを　とって　すまなかっ
だね。」

と、いいました。

「いや、ぼくのでは　ないよ。さるさんのだ。」

「さるさん、すまなかったね。」

と、きつねが　いいました。

さるは、

「いや、ぼくのでは　ない。

りすさんのだ。りすさん、
すまなかったね。」

と、いいました。

りすが、一ばん　はじめに、
見つけた　ところだと　いう
ことが　わかりました。

みんなは、

「りすさん、すまなかったね。」

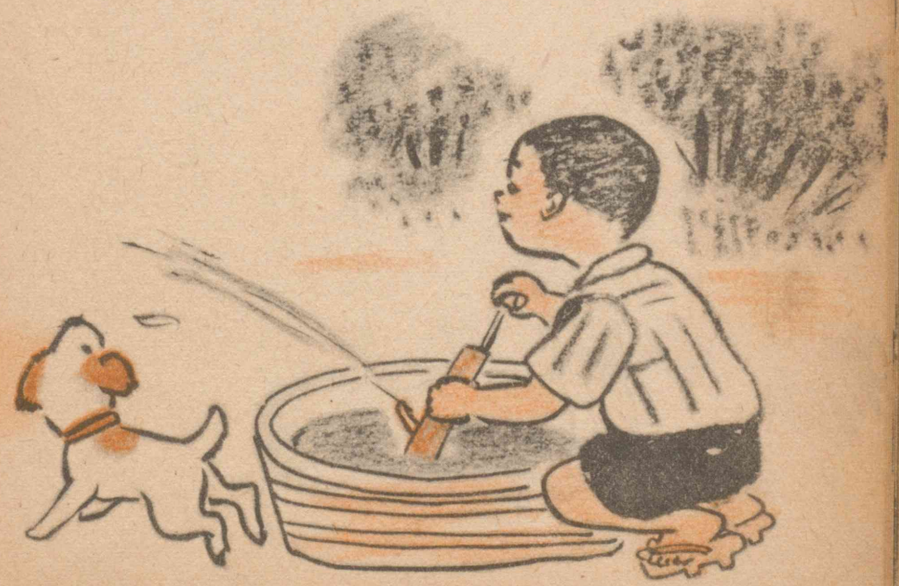
と、いっしょに　いいました。

りすは、うれしそうに　にこにこ　して　いました。

(三) うれしい なつ

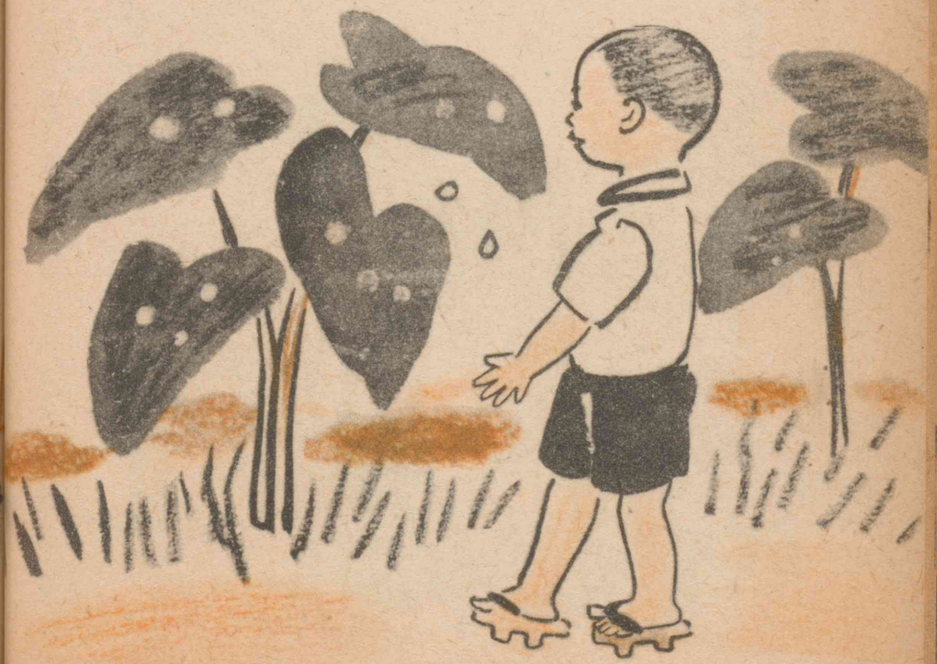
一 えにっき

水でっぽうで あそびました。
シュッ、シュッ、シュッ。
おいけの むこうへ とんで
いきます。
しろも いっしょに、
あそびます。



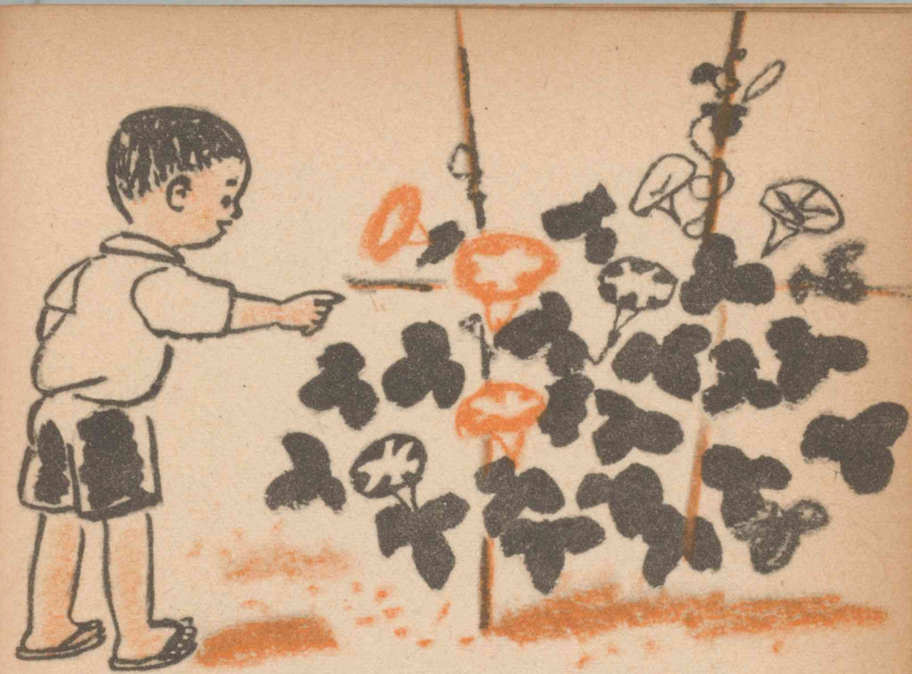
みちおさんと せみとりに いきました。
せみは、かきの 木に とまって、ないて います。
ちかよって、さっと あみを
かぶせました。
せみは あみの 中で、
「ジ、ジーッ。」と、なきました。

おいもの　はっぱに、
つゆが　きらきら。
かぜに　ゆられて、
ころ　ころ　ころ。
つゆは　ころんで、
にげてった。



しゃぼん玉あそびを　しました。
あかや　あおの　玉が　できました。
ふわり　ふわりと　のぼって
いきます。

よしこさんが、
「やねまで　あがれ、おそらに　あがれ。」
と、いいました。



きょうも　あさがおが　さ〻きました。

あかや　あおや　白の　は〻ながが、きれいに　さいて　い〻ます。

ぼくが　おきる　ころには、もう　さいて　います。

あさがおの　はなは、いつさくのでしょう。

おじさんの　うちから、すいかを　もらいました。

大きくて　ひろしさんには　もてません。

おかあさんが、

「いただきましょう。」

と　いって、きって　くださいました。

みんな、

「おいしい、おいしい。」と　いって、たべました。

二　みんなの　はなし

まさおさんの　はなし

おばさんから　おみやげに　いただいた、はなびを　しました。

はじめに、よしこさんが　しました。

火を　つけると、「パッ。」と

あかるく　なりました。

「シュッ、シュッ、シュッ。」

と、火の　はなが　でます。

みんなが、「きれい、きれい。」と

よろこびました。

こんどは、ぼくが　しました。

「シュッ、シュッ、シュッ。」

と　いって、すぐ、きえて　しまいました。

みんなが　わらいました。

また、しました。

こんどは、きれいに　火の　はなが　でました。

もみじに　なったり、やなぎに　なったり　しました。

ひろしさんは、よろこんで　手を　たたきました。

みちおさんの　はなし

おとうさんと、ふなを　つりに　いきました。
いなかみちを、どんどん　あるいて　いきました。
川に　つきました。
おとうさんと　ならんで　つりました。
すこし　すると、おとうさんの　うきが　ぴくぴく　しました。

おとうさんが　さっと　あげました。
みると、ふなが　かかって　いました。
こんどは、ぼくの　うきが　ぴくぴく　しました。
ぼくは　すぐ　あげました。
すると、ぼくのにも　ふなが　かかって　いました。
もう、ふなが　二ひき　つれました。
また、えさを　つけて　なげました。
すこし　すると、また　うきが　ぴくぴく　します。
あげようと　しても　あがりません。
おしまいには、とうとう　糸が　きれて　しまいました。

たかしさんの　はなし

おうちの　人　みんなで、海へ　いきました。

海は　たくさんの　人で　にぎやかでした。ふねも　うかんで　いました。

とびこみだいから　とんで　いる　人も　あります。

ふくを　とって、海へ　はいりました。

なみが　やって　きて、足を　ぬらしました。

おとうさんは、とおくへ　およいで いかれました。

「おとうさん。」

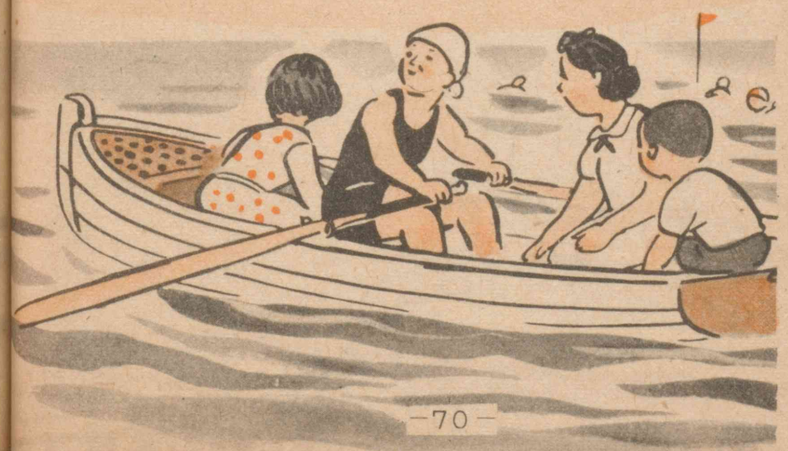
と、大きな　声で　よぶと、

「おうい。」

と　おっしゃって、にっこり　なさいました。ぼくは、海に　はいって、足を　ばたん　ばたん　しました。

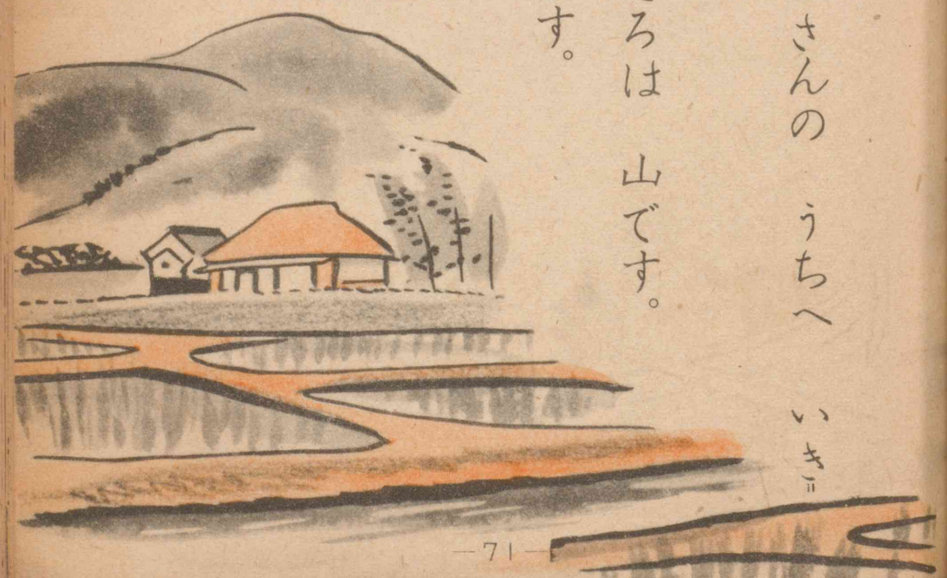
ねえさんと　すなで、川や　トンネルを　つくって　あそびました。

おとうさんが、海から　あがって　いらっしゃいました。
すなの　上で、おべんとうを
たべました。
おべんとうが　すんで、ふねに
のりました。
おとうさんが　こいで　くださ〃
いました。
なみが　きて　大きく　ゆれます。
ぼくらは、えっさ、えっさ、と、
とおくへ　こいで　いきました。



ゆきこさんの　はなし

おとうさんと　いっしょに、おばさんの　うちへ　いき〃
ました。
おばさんの　うちの　すぐ　うしろは　山です。
まえには　小さな　川が　あります。
あさ、その　川で　かおを
あらうのです。
川の　むこうに、たんぼが
つづいて　います。
たんぼには、ほの　でて　いる



いねも　あります。
おばさんの　うちには、ひろい　おへやが　あります。
すずしい　おへやです。
夕はんが　すむと、その　おへやで　すずみます。

たんぼの　上を　とおって、すずしい　かぜが　ふいて　きます。
虫が　たくさん　とんで　くるのには　こまります。
おばさんの　うちには、六年生の　ねえさんが　います。

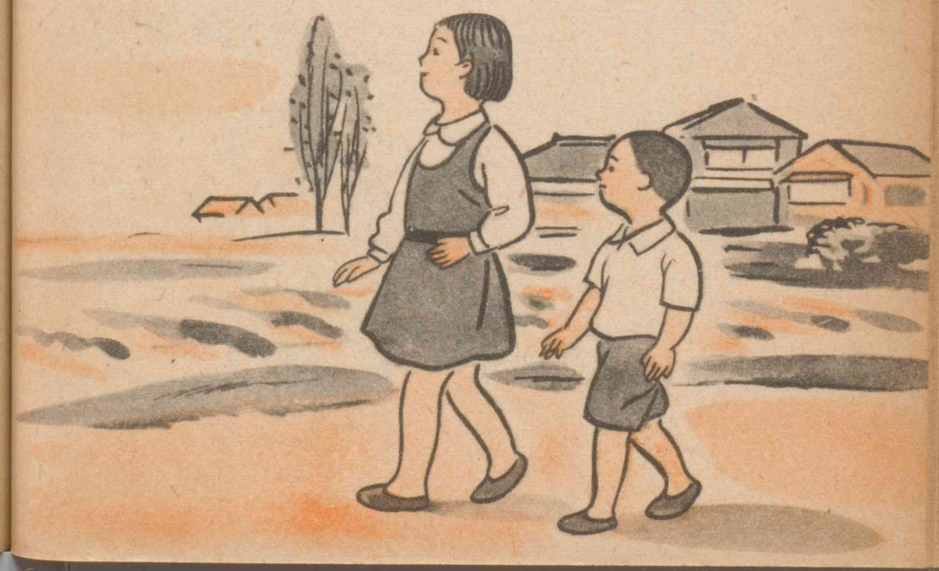
わたくしは　ねえさんと
あそびました。
おにんぎょうごっこを
したり、おはなしを　したり、
本を　よんだり　しました。
はたけに　トマトを　とりに　いった　ことも　あります。赤い　トマトが、たくさん　なって　いるのは　きれいです。

みんなで　いっしょに　たべました。
みっか　いて　かえりました。

（四）お月み

一　すすきとり

まさおさんは、ねえさんと
すすきとりに　いきました。
まちを　とおりぬけると、すず
しい　かぜが　ふいて　きます。
とんぼが、すうっ　すうっと
とんで　います。



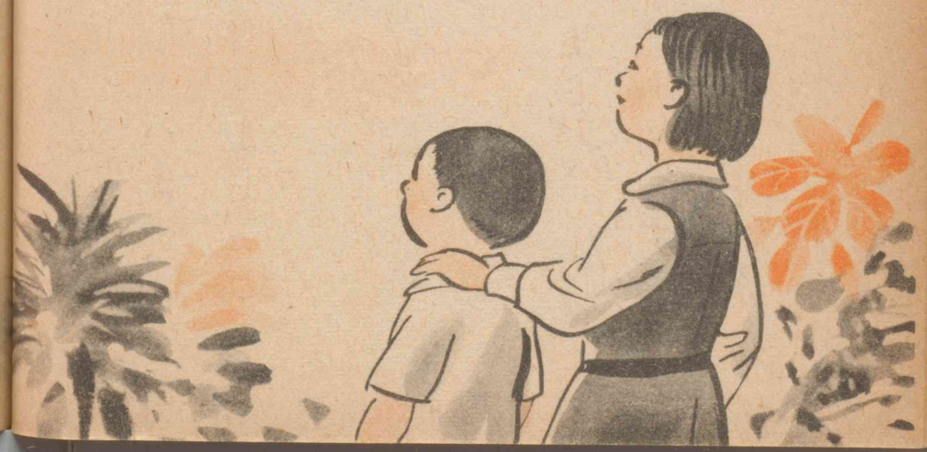
どんどん　あるいて、川の　ど
てに　つきました。
あちら　こちらに、白い　すす
きの　ほが　見えます。
かぜに　ふかれて、ゆれて　い
ます。
みちおさんや　ゆきこさんも、
すすきとりに　きて　います。
なんぼんも　なんぼんも　とり
ました。

「まさおさん、いらっしゃい。」
と、ねえさんが よんで います。
どこに いるのか みつかりません。
まさおさんは、
「ねえさん、どこに いるの。」
と、いいました。
「まさおさん、ここよ。」
ねえさんが、すすきの 中から
ひょっこり かおを だしました。

みちおさんと ゆきこさんが
きました。
「まさおさん、かえりましょう。」
と、いいました。
見ると、みちおさんたちも、
たくさん とって いました。
みんなで いっしょに かえりました。
しろが はしって むかえに
きました。

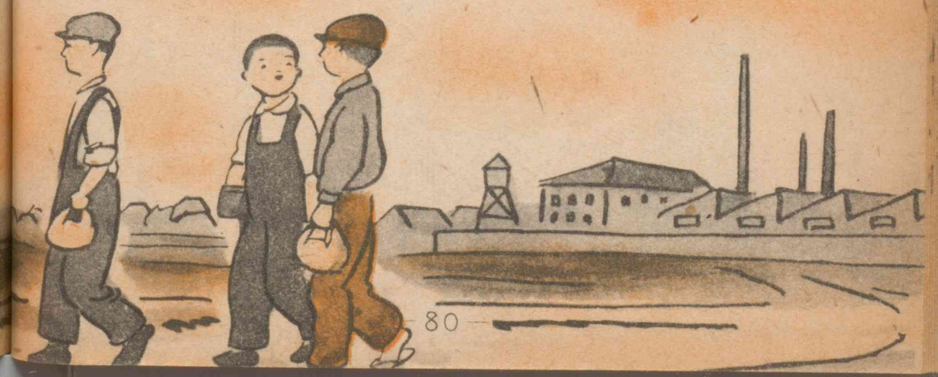
二　夕やけ

まさおさんと　ねえさんは、西の
そらを、じっと　見て　います。
あかい　大きな　お日さまが、西の
山に　はいろうと　して　います。
お日さまが　すこし　はいりました。
はんぶん　はいりました。
とうとう　はいりました。



お日さまの　はいった　ところから、
きれいな　すじが　でて　います。
そらが　まっかに　なりました。
「ねえさん、きれいね。」
と、まさおさんが　いいました。
「きれいね。」
と、ねえさんも　いいました。
からすが　かえって　いきます。
ふたりは、夕やけの　うたを　うた
いました。

かあ　かあ　からす、
お山へ　かえろ。
あの　そら　赤い。
この　くも　赤い。
夕やけ　こやけ、
あした　てんきに
なあれ。



おうちへ　かえろ、
さよなら　しましょう。
あの　そら　赤い。
この　くも　赤い。
夕やけ　こやけ、
あした　てんきに
なあれ。

三　お月みの

お月みの　よういが　できました。
みんな　えんがわに　あつまりました。
「もう　すぐ、お月さまが　でます　よ。」
と、おかあさんが　おっしゃいました。
まさおさんたちは、東の　そらを

見ました。
そらが　だんだん　あかるく　なって　いきます。
すこし　すると、お月さまが　かおを　だしました。
「やあ、でた、でた。」
と、まさおさんが　いいました。
よしこさんが、
「でた　でた　月が」
の　うたを　うたいました。

ねえさんも　ひろしさんも、いっしょに　うたいました。

お月さまが　山の　上に　あがりました。

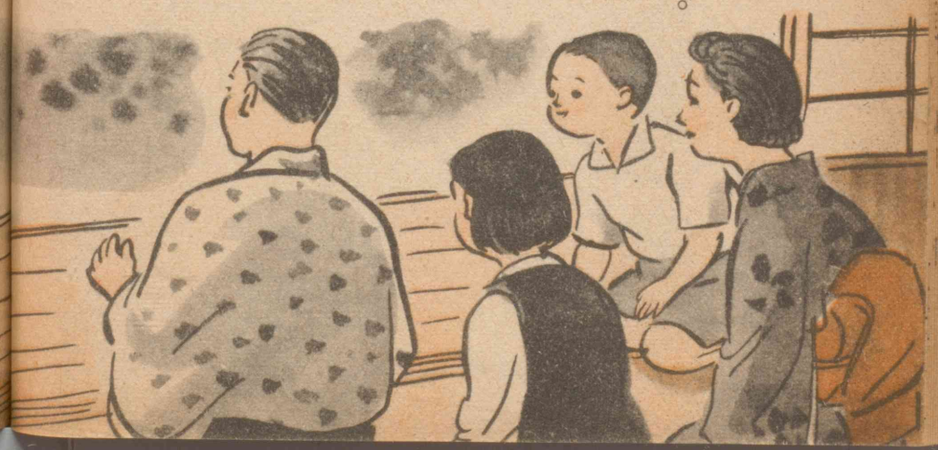
まるい　大きな　お月さまです。

空は　まえよりも　あかるく　なりました。おにわも　みちも　ひるのようです。

まさおさんが、

「お月さまの　中に、なにか　見えるよ。」

と、いいました。



よしこさんが、

「あれは　うさぎですね。」

と、いいました。

よしこさんは、

「うさぎ　うさぎの　おどり」

を　おどりました。

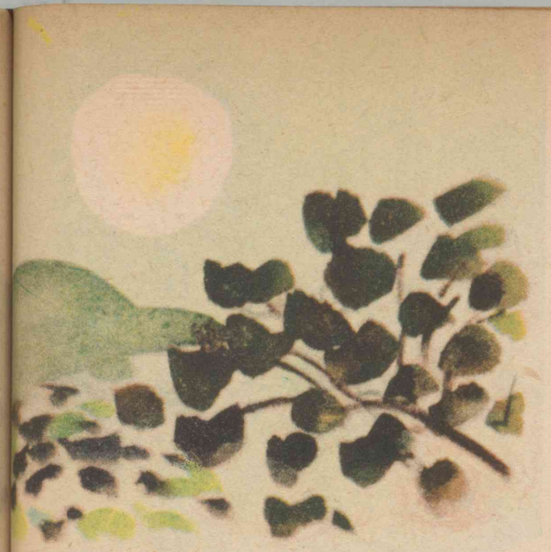
ひろしさんも　おどりました。

みんなの　かげが、たたみの　上に　おどります。

虫の　声が　きこえて　きました。

四　虫の　声

まさおさんたちは、おどりを　やめて、また、月を　見ました。



お月さまは、かがみのようです。

よしこさんが、

「ひろしさん、かげふみを　しましょう。」

と　いって、おにわに　おりました。

ひろしさんも、おりました。

ふたりは　おもしろそうに、

「ひろしさん、ふんだ。」

「おねえさん、ふんだ。」

と　いいながら、あそんでいます。

ふたりが、立ったり　しゃがんだり　すると、かげが　大きくなったり、小さくなったりします。

おかあさんが、
「虫が　いい　声で。」
と、おっしゃいました。
いままで　きが　つかなかった
虫の　声が、おにわ　いっぱいに
して　います。
みんなは、じっと　ききました。
あちらからも　こちらからも、
きれいな　声が　きこえます。
よしこさんが、

「いい　声ね。」
と、いいました。
まさおさんは、
「どうして　あんな、いい　声が
でるのだろうか。」
と、おもいました。
「おとうさん、『チンチロリン、チン
チロリン。』と　ないて　いるのは
まつむしですね。」
と、まさおさんが　いいました。

おとうさんは、
「よく しって いるね。あの『リーイ、リリイ。』と、ないて いるのは、なんと いう 虫かね。」
と、おっしゃいました。
よしこさんも わからないようでした。
「あれは、こおろぎです。『コロ、コロ。』と ないて いるのも、こおろぎです。」
と、おっしゃいました。
まさおさんは、なく 虫を かって みようと、おもいました。

○

こおろぎ ころ ころ、
くさの 中。
ころ ころ ころんで、
おにごっこ。
よつゆに ぬれて、
おにごっこ。
ひとばん ころ ころ、
おにごっこ。

(五)　おさるの　はしご

一　からすの　おばさん

あきの　ことです。
おさるさんの　山にも、いい
おてんきが　つづいて　いました。
ある日、おかあさんざるは　子ざ"
るの　きんちゃんに、
「おかあさんは、かきを　とりに

いって　きますから、あそんで　い"
らっしゃいね。」
と　いって、でて　いきました。
きんちゃんは、木のぼりあそびを
しました。
おかあさんのように、じょうずでは
ありません。それでも、えだから　え"
だへ　とびうつって　いく　ことが

できます。
そこへ　からすさんが　きました。

きんちゃんは、
「からすの　おばさん、どこへ　いったの。」
と、いいました。
「かきを　たべに　いったのよ。むこうの　山へ　いってごらん。まっかに　うれて　いますよ。」
と、からすさんは　いいました。
「おばさん、その　山は、どちらへ　いったら　いいの。」
と、きんちゃんは　また、いいました。
「この　みちを　すこし　いくと、うさぎさんの　うちが　ありますよ。そこを　左へ　いくと　いいのです。」
と、からすさんは　いいました。

二　みみちゃんと　いっしょに

きんちゃんは、うれしくて　うれしくて　たまりません。からすの　おばさんの　いった　とおり、あるいて　いきました。
まもなく、うさぎさんの　うちの　まえに　でました。。うさぎの　みみちゃんは、ひあたりの　いい　おにわで、

ぶらんこに　のって　います。
「みみちゃん　こんにちは。」
と、きんちゃんは　大きな
声で　いいました。
みみちゃんは、おどろいて
こちらを　見ました。
「ああ、きんちゃんだったの。
こんにちは。」
と、いいました。
「きんちゃん、どこへ　いくの。」

と、みみちゃんは　いいました。
きんちゃんは、
「むこうの　山へ、かきを　とりに
いくのだよ。」
と、いいました。
みみちゃんは、
「あの　山の　かき、わたくしも　見たのよ。
まっかに　うれて　いたわ。きんちゃんは
木のぼりが　じょうずで　いいわね。」
と、いいました。

「みみちゃん、いっしょに いこう。とって あげるよ。」
「とって くれる。うれしいわ。ついて いくよ。」
みみちゃんは よろこびました。
ふたりは おはなし しながら、きれいな はなの さいて いる 山みちを、どんどん
あるいて いきました。

三 赤い かき

山に つきました。木の はが 赤く なって います。

その 中に、大きな かきの 木が 一本 あります。
まっかな かきが、たくさん なって います。
「わたくしが とって なげるから、じょうずに うけなさいね。」
きんちゃんは、するすると たかい えだに のぼりました。ひとつ とって たべて みました。
あまい あまい かきです。

きんちゃんは、
「ああ、おいしい。」
と、いいました。
「きんちゃん、早く　わたくしにも　くださいよ。」
と、みみちゃんが　いいます。
「ああ、わすれて　いた。ひとつ　あげよう。」
と　いって、きんちゃんは　なげました。
下では　みみちゃんが、じょうずに　うけました。

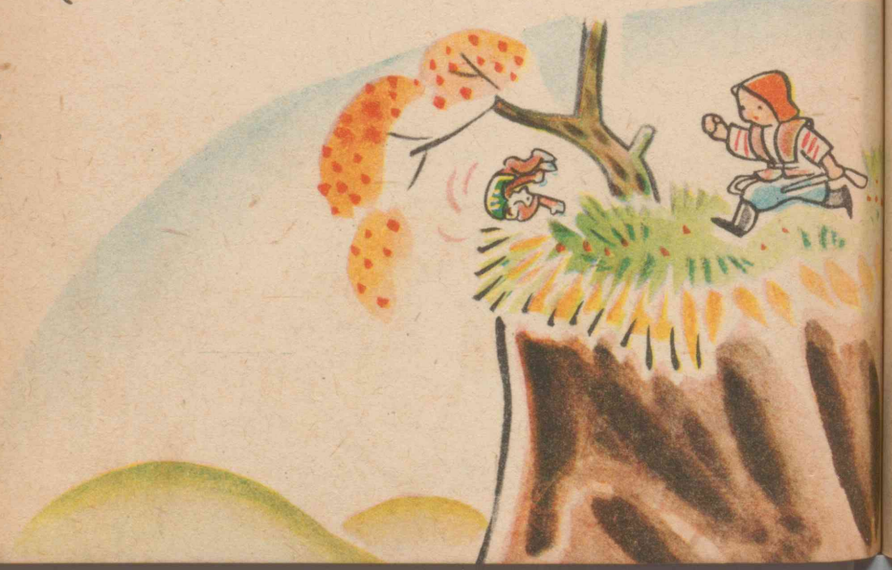
きんちゃんと　みみちゃんは、かおを　見あわせて　にっこり　します。
ふたりは　たくさん　たべました。
おなかが　いっぱいに　なりました。
「きんちゃん、もう　かえらない。」
と、下から　いうと、
「もう、かえりましょう。」
と、上から　へんじを　します。
その　ときでした。みみちゃんは、りょうしの　くるの。

に　きが　つきました。

四　てっぽうの　音

「きんちゃん、きんちゃん、りょうしが　きましたよ。
早く　にげましょう。」
みみちゃんは　いいました。
「ドーン。」
と、てっぽうの　音が　しました。
たまは、きんちゃんの　耳の

よこを　とおりました。
きんちゃんは、おどろいて
手を　はなしました。
えだから　おちた　きんちゃん
は、ころころ　ころがって　いき
ます。
がけから　たにへ　おちて
しまいました。
りょうしは、がけから　下を
見て　いましたが、たにへ　おりて



いきました。

五　きんちゃんが　いない

おかあさんは、みみちゃんの　しらせで　はしって　きました。

みみちゃんと　いっしょに　さがしました。

木の　下や、くさの　中まで　さがしました。

どこにも　見つかりません。

がけの　ところに　きました。

「おばさん、この　がけから　おちたのでは　ないの。」

と、みみちゃんは　いいました。

おかあさんは、

「この　がけから　おちたら　たすからないよ。」

と、しんぱいそうに　下を　見ました。

みみちゃんは、

「大きい　声で

よんで　みましょう。」
と、いいました。
「きんちゃあん、きんちゃあん。」
と、ふたりは　なんべんも　なんべんも
よびました。
すると、がけの　下の　ほうから、
「おかあさあん、おかあさあん。」
と　いう、声が　します。
みみちゃんは、
「がけの　下に　いますよ。よかったね。」

と、いいました。
おかあさんは、なかまを　たくさん　よんで　きました。

六　ながい　はしご

ひとりの　なかまが、木に　しっかりと　つかまりました。つぎから　つぎと、みんなが　手を　つなぎました。足を　つなぎました。
おさるの　はしごが　できました。
おさるの　はしごは、ゆらゆらと　さがって　いきます。

はしごの　さきの　ひとりが　下を　見ると、きんちゃんが　いました。

きんちゃんは、がけの　中ほどの　木の　えだに、つかまって　います。

「いたよ、いたよ。きんちゃんが　いたよ」

と、なかまに　しらせました。

おさるの　はしごは、だんだん　ながく　なって　いきます。

とうとう、きんちゃんの　いる　木の　えだに　とどきました。

きんちゃんは、うれしくて　なきだしました。

「きんちゃん、早く　おあがり。」

と、なかまの　おさるさんたちは　いいました。

きんちゃんは、一だん一だんと おさるの はしごを のぼりました。

がけの 上に いた おさるさんたちは、きんちゃんを だきあげて、

「よかったね、よかったね。」

と、よろこびました。

おかあさんは、

「ありがとう、ありがとう。」

と、おれいを いいました。

たにそこを あるいて いたりょうしは、おさるの はしごを じっと 見て いました。

おしごとの　手びき

(一)　はるが　きた

1　「はるが　きた」の　ところを　よく　よみましょう。

○「はるの　うた」には、おなじ　ことばが　たくさん　あります。おなじ　ことば　に　しるしを　しましょう。

○まさおさんの　いった　ことばに　しるしを　つけましょう。

二年生だよ。　二年生だ。

二年生だもの。　二年生よ。

○まさおさんが　えんそくに　いって、みた　ものに　しるしを　つけましょう。

とんぼ。　めだか。　なの　はな。

一年生の　子ども。　すいげんち。

2　おはなしが　わかるように　しなさい。

（あいた　ところに　ことばを　いれるのです。）

○まさおさんたちは、小川の　□□で　ささぶねを　つくりました。

○「ぼくは　□□□のを　つくるよ。」

と　たかしさんが　いいました。

○大きな　ささぶね、□さな　ささぶね。

が　すべるように　□□□て　いきました。

○めだかは　□□□□□　とまりません。

○すいげんちには、□が　たくさん　あって、□□□のようでした。

3　まさおさんは　二年生に　なって、いろいろな　ことを　しました。

まさおさんの　した　ことを　おはなし　して　ごらんなさい。

4　みなさんが　二年生に　なって　うれしかった　ことを　おはなし　しましょう。

5　はなの　なまえを　あつめましょう。

すみれ　たんぽぽ　□　□　□　□　□　□

6　じを　かきましょう。かく　じゅんじょに　きを　つけましょう。

年	生	先	足
一二三四五六七八九十	一二三四五六七八九十	一二三四五六七八九十	一二三四五六七八九十
年	生	先	足

(二)　おじさんの　うち

1「きしゃ」の　ところを　なんべんも　よんで、まさおさんが　みたり　きいたり　した　じゅんに　ならべなさい。

じてんしゃに　のった　人。
たくさんの　人。
ふね。　トンネル。
一ろうさん。　「ピイーッ。」
「パッチン、パッチン。」

2　まさおさんが　いなかみちを　あるき、ながら、みた　ものに、○を　つけなさい。

むぎかりを　して　いる　人。
うま。　うし。　ほたる。
ふなを　とって　いる　子ども。
じどうしゃ。

3　□の　中に　ことばを　いれなさい。

○まさおさんは　おじさんの　うちで　□□を　見ました。
○おじさんの　うちは　□□□□の　大きな　いえです。
○かきの　木が　□□□□と　して　います。

○川には　きれいな　□が、□□□□　います。
○おじさんが　かいばおけを　たたくと、こうしは　□□□□と　して、□□□□を　みました。

4　だれと　だれでしょう。

○おじさんの　うちへ　いったのは。
○ほたるとりに　いったのは。

5　「おじさんの　はなし」を　よんで　□の　中に　ことばを　いれなさい。

○さるは　□□□を　見ると、おどろいて　にげて　いきました。
○みんなは　□□さんに、「すまなかった　ね」と　いって、あやまりました。
○□□が　一ばん　はじめに　すずしい　ところを　みつけました。
○きつねは　□□を　見ると、いそいで　にげて　いきました。
○□□は　さるを　見ると　□□□□□　にげて　いきました。
○山の　□□□□たちは　すずしい　□□を　さがして　いました。

(三) うれしい なつ

1 うれしい なつの ところを よく よんで みましょう。

2 みなさんも なつは うれしいでしょう。

なつの あいだに、みなさんの したこと、みた こと、きいた ことを おともだちに しらせるには、どう したら よいでしょう。

3 えにっきは まさおさんが かいたのです。なんの ことを かいて いますか。

(1) (2) (3) (4) (5) (6)

4 えにっきの ところを よく よんで、つぎの ことばの 下を つづけて、おはなしが わかるように しなさい。

○水でっぽうで

○すいかを

○せみとりに

○あさがおが

○あかや あおの 玉が

○みんなで 海へ

5 おはなしは だれが したのですか。どんな おはなしを したのですか。

(1) (2) (3) (4)

6 四人の おはなしで だれのが 一ばん じょうずだと おもいますか。

7 うれしい なつの ところで あたらしく でた ことばを かきましょう。

8 かんじを かきましょう。

海	赤	虫
海	赤	虫

(四) お月み

1 「すすきとり」から「虫の 声」までの 中で、まさおさんの「みた こと」を かいて おきます。これを 本の じゅんに ならべなさい。

○からすの かえるのを 見ました。

○お日さまの はいるのを 見ました。

○白い すすきの ほを 見ました。

○お月さまの あがるのを 見ました。

2 □の 中に ことばを いれて、おはなしの わかるように しなさい。

□に いれる ことばは、つぎに かゞいて ある ものから とりなさい。

「白い。おどり。とおりぬける。まっか。」

○ まちを □と、すずしい かぜが ふいて きます。

○ みんなの かげが たたみの 上に □ます。

○ そらが □に なりました。

3 「すすきとり」から「虫の 声」までの おはなしの 中に、でて くる 人に、○を つけなさい。

	すすきとり	お月み	虫の声
おかあさん			
ねえさん			
まさおさん			
よしこさん			

4 虫の なきごえを いれなさい。

○ まつむし—

○ こおろぎ—

5 「夕やけ」の ところには、おなじ こゞとばが なんべんも でて います。ノートに かいて ごらんなさい。

6 「お月さまが かがみのようです。」

こんな ときは、どんな よるですか。つぎの ことばの 上に ○を つけなさい。

くらい よる。 あかるい よる。

7 □の 中に じを いれなさい。

○ どんどん あるいて □の どてに つきました。

○ まさおさんたちは □の そらを みました。

○ あかるい 大きな お□さまです。

(五) おさるの はしご

1 おさるの はしごを よみましょう。

つぎの こたえを ノートに かきなさい。

○ きんちゃんは かきを とりに、だゞれと いっしょに いきましたか。

○ 「ドーン。」と うたれて、きんちゃんゞは、どこへ ころがって いきましたか。

○ おさるの なかまが なにを つくゞりましたか。

○ この おはなしで、どこが おもしゞろいと おもいますか。

2 つぎの ことばを おはなしの じゅんに ならべて ごらんなさい。

○ りょうしは おさるの はしごを じっと 見て いました。

○ たまは きんちゃんの 耳の よこを とおりました。

○ きんちゃんは 山に かきを とりに いきました。

3 □の 中に ことばを いれなさい。

おさるの はしごが □□□□□。はしごは ゆらゆらと さがって □□□□。はしごは だんだん □□□ □□□ いきます。とうとう、木の えだに □□□□□□□。

きんちゃんは □□□□□ なきだしました。

4 「赤い かき」の ところで、きんちゃんの いった ことば、みみちゃんの いった ことばに しるしを つけなさい。

5 「おさるの はしご」の えの おはなしが できますか。じょうずに できるまで、おけいこしなさい。

あたらしく でた ことば

あいさつ……(11)
あおい……(38)
あかるく（あかるい）……(38)
あき……(92)
あし……(28)
あちら……(41)
あっ……(28)
あつい……(49)
あつまり（あつまる）……(24)
あふれて（あふれる）……(42)
あまい……(99)

あら……(47)
いそがしそう……(17)
いちだん……(110)
いつ（いつも）……(62)
いっぱい……(88)
いと……(67)
いま……(88)
いも（おいも）……(60)
うかんで（うかぶ）……(68)

うき……(66)
うけなさい（うける）……(99)
うし……(41)
うしろ……(71)
うみ……(38)
うれて（うれる）……(94)
えにっき……(58)
えだ……(93)
えん……(19)
えんがわ……(82)

えんそく……(15)
おいぬいて（おいぬく）……(33)
おうい……(69)
おきます（おく）……(19)
おくる……(51)
おつかい……(12)
おなか……(101)
おにごっこ……(91)
おもいきって（おもいきる）……(28)
およいで（およぐ）……(26)
おります（おりる）……(39)
かあかあ……(80)

かいばおけ……(45)
かがみ……(86)
かげふみ……(86)
がけ……(103)
かぜ……(4)
かまぼこ……(15)
かみ……(15)
かわりました（かわる）……(8)
き（きがつく）……(88)
きえて（きえる）……(65)
きし（かわぎし）……(30)
きっぷ……(34)
きって（きる）……(34)

きてき……(35)
きのぼり……(93)
きもち……(35)
きょう……(20)
きょとん……(45)
きんちゃん……(92)
くち……(44)
くま……(53)
くも……(4)
くろい……(54)
こいで（こぐ）……(70)
こおろぎ……(90)

ゴーッ……(37)
こっち（こちら）……(5)
こぶまき……(16)
こまります（こまる）……(72)

さがして（さがす）……(49)
さき……(108)
ささぶね……(30)
さした（さす）……(6)
ジジーッ……(59)
した……(100)
しっかり……(45)
じっと……(44)

しゃがんだり（しゃがむ）……(87)
しゃぼんだま……(61)
しらせ……(104)
しんぱい……(105)
すいか……(63)
すいげんち……(24)
すぐ……(46)
すこし……(23)
すすきとり……(74)
すずしい……(49)
すずみ（すずむ）……(72)
すまなかった（すまない）……(56)
すると……(13)

するする……(99)
せみとり……(59)
そら（おそら）……(61)
たかしさん……(31)
たたみ……(85)
たに……(103)
たにそこ……(111)
たまご……(15)
たまりません……(21)
たんぼぼ……(6)

ちえこさん……(12)
ちち……(45)
ちょうちょう……(23)
チンチロリン……(89)
つかまって（つかまる）……(108)
つきみ（おつきみ）……(74)
つくえ……(9)
つゝ……(21)
つゆ（よつゆ）……(60)
つよい……(54)
つり……(66)
つれて（つれる）……(12)
つんで（つむ）……(25)
で〳〵ぐち……(39)
てんき……(81)
どうぶつ……(49)
とおく……(69)
とおりぬける……(36)
どちら（どっち）……(94)
どて……(75)
とどき（とど〳〵）……(109)
とびうつって……(93)
とびこみだい……(68)
トマト……(73)
とんから……(4)
ドーン……(102)
な（なのはな）……(22)
ながい（ながく）……(107)
ながし（ながす）……(31)
なかま……(107)
なげました（なげる）……(67)
なつ……(51)
なって（なる）……(73)
なみ……(68)
にし……(78)
にっこり……(10)
にねんせい……(8)
にわとり……(43)
にんじん……(16)

ぬれて（ぬれる）……(29)
のむ……(24)
はし……(23)
はしご……(92)
ばたんばたん……(69)
パッ……(64)
バッチン……(35)
はな……(6)
はなび……(64)
はんぶん……(78)
ひ……(64)
ひあたり……(95)
ひがさ……(6)
ひがし……(82)
ひだり……(95)
ひとばん……(91)
ひょっこり……(76)
ひらひら……(23)
ひる……(84)
ふいて（ふく）……(32)
ふうわり……(6)
ふんだ（ふむ）……(87)
へや（おへや）……(8)
へんじ……(14)
ほ……(71)
ほう……(46)
ほうき……(48)
ほたる……(46)
ほめる（おほめ）……(13)
まえ……(9)
まつむし……(89)
まもなく……(21)
みあわせて（みあわせる）……(101)
みず……(24)

みずでっぽう……(58)
むし……(72)
むぎかり……(41)
むぎばたけ……(29)
めだかすくい……(25)
もみじ……(65)
もらい（もらう）……(34)
やっと……(55)
やっぱり……(54)
やなぎ……(65)

ゆうやけ……(78)
ゆらゆら……(107)
よこ……(103)
リリー……(90)
りょうし……(101)
わけ……(56)
わらやね……(43)

かんじ

年(8)　水(24)　口(44)　海(68)　東(82)
生(8)　足(28)　立(52)　虫(72)　空(84)
先(9)　下(33)　声(53)　赤(73)　左(95)
見(18)　音(35)　火(64)　月(74)　早(100)
百(19)　白(37)　糸(67)　西(78)

こくご二年生上の編修について

一、本書は、教育基本法、学校教育法、学習指導要領一般編、同国語科編、小学校国語科検定基準などの趣旨を具体的に現わすことにつとめた。児童の興味や生活経験や心理的発達に即して単元学習をはかっている。

二、二年生用は、上・下の二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに使用するように組み立てられている。

三、本巻の単元は、「はるがきた」で、まさおが二年生になった場合のよろこびと心がまえとを述べ、「おじさんのうち」では、旅行をすることによって楽しみの中に生活経験をひろげ、「うれしいなつ」では夏休みの反省の中に自分を見つめ、自分を表現することをねらい、「お月み」では、生活の情操をゆたかにすると同時に自然に対する関心を深め、「おさるのはしご」では興味ある物語の世界に遊ぶことによって生活に巾を持つことが考えられている。この五単元は、まさおが国語学習を進めていく姿とも見ることが出来るのであって、特に注意したいところである。

四、本巻の新出語彙は総数百九十三語で、各頁の新出語彙は二―三語に止めてある。文体は児童の生活言語に即した敬体を用い、文構造の基本的なものとした。同時に文体に変化を持たせることにも注意をはらった。

五、仮名は平仮名を本体とし、擬声語、擬態語、外来語を写す場合にのみ、片仮名を用いた。擬声語、擬態語も副詞的に用いられた場合は平仮名とした。外来語も現代語感の上から外来語意識の弱いものは平仮名とした。漢字の新出は二十四字である。基本的なもの、児童の書写力に即したものを提出し、漢字学習の負担を軽くすることに留意した。

六、巻末に語彙表と「おしごとの手びき」を示し、児童の学習、教師の指導の便をはかった。これを手がかりとして諸種の国語学習がなされることを期待してのことである。

Copyright 1949, by
The Gakkō Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any pary thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国209

こくご二年生　上

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 14, 1949)

感謝のことば

「たんぽぽ」……野口雨情氏作

右の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者の方に厚く感謝申しあげます。

編者
廣島市東千田町
廣島高等師範学校附属小学校内
財団法人 学校図書研究会
会長 廣島高等師範学校教授 兼附属小学校主事 森岡文策

執筆担当者
廣島高等師範学校教諭 今石光美
大西久一
小川利雄
原田直茂

表紙とさしえ
田原輝夫
田中壽太郎

昭和二十四年七月十一日印刷
昭和二十四年七月十五日発行
昭和二十四年十月十四日再版印刷
昭和二十四年十月十八日再版発行

定價　円　銭

著作者
廣島市東千田町 廣島高師附属小学校内
財団法人 学校図書研究会
会長 森岡文策

発行者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎

印刷者
東京都港区芝三田豊岡町八番地
図書印刷株式会社
代表者 川口芳太郎

発行所
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社

広島大学図書
0130449667